

戦後六十五年を顧みる

港北区支部 石塚 喜代子（妻）

戦没者 石塚 清一郎

戦没地 フィリピン

「二十日の敬老会たのむね」「先約があるから無理、無理」「何とかならない」この数日こんなやり取りの電話ばかりだ。七十歳を期に仕事をやめ老人会に入会した。老人会で民謡や踊り、三味線と若い頃習い覚えた芸を披露したところ思いのほか大好評。踊りの師匠依頼まで話が及んだ。その昔、生活に追われながらも大好きな歌と踊りと三味線を極めたくて寸暇を借しんではお稽古に励んだ。その甲斐あってコンクールでも何度か優勝できた。その経験を試す絶好の機会とばかり師匠役を引き受けた。

踊りの小道具として買い求めた錢太鼓をもとに振り付けを考案した。

錢太鼓を上下左右と振り回して舞うことで、威勢と景気の良さが感じられお客さんの受けも良かった。好き者同士が集い、私が師匠、愛好者が弟子となつて踊りの会が誕生した。この太鼓が【錢太鼓踊りの会】と命名される基にもなっている。

「錢太鼓踊りの会は何流ですか?」「いい加減流」受け答えもいい加減。

常に笑いがモットーである。お誘いがあればどこへでも出向き披露している。老人会、介護施設、ケアプラザ等々、みんなの笑顔がうれしくてボランティア活動に燃えている。

「あの民謡の振り付けは？」「司会の語りはどうしよう」考えることは山ほどある。気がついたら九十二歳といった具合だ。ケガが元で足に多少の不自由さはあるが、大勢のお弟子さんが入れ替わり立ち替わり訪ねてくれることもあり毎日心丈夫でいられる。

この度、戦争の体験手記を書いて欲しいとの依頼に躊躇する気持ちもあったが、来し方に想いをさせることにした。

私の半生は戦争と対峙することから始まったと言ってもいい。それは戦争の足音高い昭和十六年東武鉄道勤務の石塚清一郎と結婚、埼玉県加須市に所帯をもった。召集されるまでの二年余りは借家住まいながらも穏やかに世間並みの幸せを満喫していた。

召集後、教育期間も終わりのよい戦地に赴くということと家族との面会が許可になった。交通機関の発達していない当時のこと、身重であった私は遠出が無理であり面会に行けなかった。話したいことは山ほどあるのに最後の別れの言葉すらかけられなかった。

そうこうしているうち戦局はますます厳しく不安ばかりが募る中、十九年七月娘を出産した。翌年三月東京大空襲で東京は火の海と化し、沢山の犠牲者が出た。深川に住む叔母も犠牲者の一人だ。命からがら逃げのびてきた叔母との生活がこの時より始まった。

程なく夫の戦死公報が届いた。【石塚清一郎】と書かれた紙切れ一枚が遺骨箱に納められていた。一片の骨も一本の髪の毛もなく、父なしの子を抱きしめてただ涙するしかなかった。どこで

斃れ、どんな最後だったのか、遺族の一番知りたいことは何も分からずじまい。一方的に受け取らざるを得ないのが現実であった。後に夫を知る帰還兵の方からフィリピン・マヨヤオ島で戦死したと聞いた。

戦死公報が入るまでは給料が家族のもとに届いていたが、戦死公報と同時に無給となってしまう。見かねた夫の勤務先であった東武鉄道の社長の計らいで、私の仕事は確保できた。娘を叔母に託し男並みに必死に働いた。群馬に住む親・兄弟からの物資援助を受けていたので何とか日々の暮らしはできた。

三年が過ぎた頃「東京事業所に事務の仕事がある」とのお誘いで娘と二人東京に移り住んだ。社長のご好意と社長の姪御さんの手助けもあって子育てしながら勤めを継続、五年が経過した。何かと後ろ盾をお願いしていた社長が突然逝去、そのこともあって会社が倒産し私も失業してしまった。

やつとのこと個人宅に仕事を見つけ、親子二人が生きる道ができ、五年踏ん張った。その後、保険の外交の仕事についた。娘との時間が持てるのではと考えた末の決断である。外交員として十年ほど経た頃、横浜で寿司屋を開店した弟から手伝いの誘いが来た。新規保険加入者開拓の厳しさを知っている弟の温情である。ありがたい話と横浜桜木町に住まいを移し、それ以降七十歳を迎えるまで寿司屋の裏方仕事を一手に引き受け働いてきた。

三十三歳のとき大病を患ったが、その後は大きな禍もなく今日を迎えている。忌わしい戦争は思い出すのも憚るが、大勢のお弟子さんの助けも借りて心豊かに暮らせることに感謝している。

ボランティアであれ、何であれ沢山の人のかわりを大切に、好きな芸のおすそ分けができるよう百歳を目標として前向きに生きたいと思う。